

上枝美典（福岡大学）

懐疑論の種類

一口に懐疑論といってもさまざまなタイプがある¹。懐疑論は通常、知識に対する懐疑論だが、やや異なるタイプとして（認識的）正当化に対する懐疑論がある。前者は「私たちは知識を持たない」と主張するが、後者は「私たちは合理的な信念を持たない」と主張する。とくに内在主義者にとって、後者は前者よりも深刻な懐疑である。

懐疑の程度（強さ）についても違いが認められる。ある人は、「私たちは（たとえば）外界の実在性について決定的な証拠は何も持っていない」と論じるであろう。しかし別の人は、「私たちは外界の実在性について全くなんの証拠も持っていない」と論じる。感覚経験から外界の実在性に至る推論は十分でないと論じるのは前者であり、夢を見ている可能性を否定できないかぎり外界についての知識を持ち得ないと論じるのは後者である。

また懐疑の範囲という点では、大域的な懐疑と局所的な懐疑がある。前者は、知識であれ正当化であれ、人間はそういうものを全く一切持たないと主張する。これに対して後者は、ある特定の領域の知識を否定する。哲学史上有名な領域としては、外界（の実在性）、神の存在、他者の心、倫理的真理、などがある。

オーダーの違いというものもある。たとえば「私はPを知っているわけではない」は一階の懐疑だが、「私は自分がPを知っていることを知っているわけではない」は二階の懐疑である。ソクラテスの「不知の自覚」が、このような知とどう関係するかということは、興味深い問題である。

この他にも、「Pを知っているわけではない」ことを証明しようとする積極的な懐疑論²と、「Pを知っている」ことを示す理論の否定を本体とする消極的な懐疑論³の違いなど、さまざまな違いがある。

対処法

次に示すのは、主としてデカルトに由来するとされる典型的な懐疑論である。

¹ 懐疑論の種類と対処法の整理にかんしては、以下の文献を参考にした。William P. Alston, *Beyond "Justification": Dimensions of Epistemic Evaluation* (Ithaca: Cornell University Press, 2005), Laurence Bonjour, *Epistemology: Classic Problems and Contemporary Responses* (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, INC., 2002), Earl Conee and Richard Feldman, *Evidentialism: Essays in Epistemology* (Oxford: Oxford University Press, 2004), Richard Fumerton, *Metaepistemology and Skepticism* (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, INC, 1995), John Greco, "Introduction: What Is Epistemology?," in *The Blackwell Guide to Epistemology*, ed. John Greco, Ernest Sosa (Oxford: Blackwell Publishers, 1999), Peter D. Klein, "Skepticism," in *The Oxford Handbook of Epistemology*, ed. Paul K. Moser (New York: Oxford University Press, 2002).

² たとえばアカデメイア派の懐疑論。

³ たとえばピュロン主義。

- 1 私が暖炉の前に座っていることを知っているためには、私が夢を見ていないことを知っている必要がある。
- 2 私は自分が夢を見ていないことを知っているわけではない。
- 3 ゆえに私は暖炉の前に座っていることを知っているわけではない。

あるいは現代的な道具立てを用いて次のように構成することもできる。

- 1 私が自分に手があることを知っているためには、私は自分が培養槽中の脳でないことを知っている必要がある。
- 2 私は自分が培養槽中の脳でないことを知っているわけではない。
- 3 ゆえに私は自分に手があることを知っているわけではない。

この推論には、「暖炉の前に座っている」「自分に手がある」という日常的な事態と、「夢を見ていない」「培養槽中の脳でない」という懐疑論的想定とが現れている。前者をO、後者をHとすると、形式は左記の通りである。

(S K)

- 1 私がOを知るためには、私はHを知る必要がある。(OならばH)
- 2 私はHを知っているわけではない。(Hでない)
- 3 ゆえに私はOを知っているわけではない。(ゆえにOでない)

Oは外界についての任意の命題でありうる。したがってこの議論が正しいならば、外界についての大域的な懐疑論が成立する。以下この推論をS Kと呼び、これをもとにして、懐疑論の対処法にどのようなものがあるかを概観してみよう。

このタイプの懐疑論を克服するには、この推論の誤りを示すことが有効である。デカルト自身は、コギトから神の存在証明を経た（現代人から見ると一見奇妙な）推論によって2が偽であることを示そうとした。その議論が有効か否かは措くとして、デカルトが2を否定する必要を感じたことは、彼が1を認めていることを示唆する。

有名な「外界の証明」でムーアが提示した議論も、デカルトと同じく2が偽であることを示そうとするものである。もっとも、彼が用いた方法（両手を振る！）はデカルトのそれとは全く異なる。

外在主義

S Kの2を否定することが困難だと感じる者は、1を否定することを考えるだろう。1を単純な含意の命題⁴だと見なすならば、その否定は次のようになる。

(1の否定) 私はHを知っているわけではないが、Oを知っている。⁵

⁴つまり、「私がOを知っているならば、私はHを知っている」という命題と見なす。

⁵ 定義より、 $P \rightarrow Q$ は $\neg P \vee Q$ と同値。したがって、 $\neg (P \rightarrow Q)$ は $P \wedge \neg Q$ と同値。

これは、Hの不知とOの知が両立可能だという主張である。つまり、夢を見ていないことについての不知と、外界についての知が両立可能であるという主張を弁護できれば、1を否定することができる。

一般に外在主義と呼ばれる知識の理論は、この主張の当面の弁護が可能である。つまり主観的（内在的）見地から自分が夢を見ていないことを示すことはできないが、客観的見地から他人が睡眠中か覚醒中かを判定することができる。そして客観的（外在的）見地から私が覚醒していることを証明する（他人に証明してもらう）ことができるならば、その場合に私は外界についての知識を持っていると言える。

外在主義に対する定番の批判は、「問題を取り違えている」「的はずれだ」というものである。中でも、そもそも外在主義が想定する外在的立場なるものに認識者が現実立つことができるのかという問題は重要である。もしそれが不可能なのであれば、外在主義は懐疑論研究にとってたんに空疎である。

認識的閉包

外在主義とは違うかたちで1を否定しようとする戦略もある。そもそもなぜ暖炉の前にいることを知るためには夢を見ていないことを知る必要があるのだろうか。あるいは、自分に手があることを知るために、なぜ自分が培養槽中の脳でないことを知る必要があるのだろうか。それは次のように考えるからである。すなわち、もし私が今現在暖炉の前に据わっているというリアルな夢を見ているのだとすれば、私は実際には布団の中やベッドの上にいたのであり、暖炉の前に座っているのではない。同じように、もし私が実際に培養槽中の脳であれば今見えている私の手は幻覚に過ぎない。これは自明である⁶。

S Kの1は、このより自明な命題から導かれていると考えられる。その形式は次の通りである。

- 1 私は「HでないならOでない」と知っている。
- 2 私は「OならばHである」と知っている。(対偶)
- 3 私がOであることを知っているならば、私はHであることを知っている。(認識的閉包)

この3が、S Kの1である。2は、任意の命題Pを知っているなら、その命題の対偶を知っているということなので問題はないだろう。問題は3である。「Pを知っている」をK(P)と書くならば、2と3は次のようになる。

- 2 $K(O \rightarrow H)$
- 3 $K(O) \rightarrow K(H)$

2から3を導くためには、次の原理が必要である。

⁶ たまたま暖炉の前に座りながら暖炉の前に座っている夢を見ているという状況や、培養槽中の脳が実に奇妙なしかたで手を持っているという状況は除外する。このような状況を考慮に入れるならば、否定される命題には「私はこの暖炉の前にはいるのではない」「私はこの手を持つわけではない」というように、もう一工夫が必要であろう。

【E C】 $K(P), K(P \rightarrow Q) \Rightarrow K(Q)$ ($K(P)$ と $K(P \rightarrow Q)$ から $K(Q)$ を導いてよい)

これがいわゆる含意に関する認識的閉包原理 (epistemic closure principle) である⁷。すなわち S K はE Cに基づく。したがってE Cを否定できるならば S K を否定できる。 $Dretske$ ⁸や $Nozick$ ⁹は、独自の分析に基づいてこの原理を否定する。

たとえば $Nozick$ は「 S は P を知っている」を次のように分析する。¹⁰

- 1 P は真。
- 2 S は P を信じている。
- 3 P でない可能世界で、 S は P と信じていない¹¹。
- 4 P である可能世界で、 S は P と信じている。¹²

1 と 2 は標準分析と共通する。 S の信念が現実世界において事実と一致すべしという要請である。 $Nozick$ はこの要請を可能世界に拡張する。3 と 4 は S の信念が可能世界においても事実と一致すべしという要請である。とくに強力なのは 4 であり、たんに P でない可能世界だけでなく、現実世界と同様 P でありながら、しかし現実世界とは多少状況が異なる他の可能世界においても P という信念を捕まえることを要請する。信念が事実をどこまでも追跡していくというイメージから、この理論は「追跡理論」(tracking theory) と呼ばれる。

さて、私が培養槽中の脳である ($\neg H$) ならば、私には手がない ($\neg O$)。私はそれを知っている ($K(\neg H \rightarrow \neg O)$)。だから、その対偶である「私に手があるならば私は培養槽中の脳でない」ということも知っている ($K(O \rightarrow H)$)。ここまではよい。問題は、このことから「私に手があることを知っているならば、自分が培養槽中の脳でないことを知っている」($K(O) \rightarrow K(H)$) を導いてよいかどうかである。

追跡理論によれば、 $K(O)$ が言えるためには、 O について私がその事実を追跡できることが必要である。つまり O の真偽を現実世界だけでなく到達可能な可能世界においても判定できなければならない。 H についても同様である。 $K(H)$ が言えるためには、自分が培養槽中の脳かどうかについて、現実世界だけでなく可能世界においても真偽の正しい判断が必

⁷ この一見大仰な表現は、代数などでたとえば、整数 $\times$ 整数は必ず整数になるが、整数 $\div$ 整数は整数であるとは限らないというようなことを「整数体は乗法のもとに閉じているが除法のもとに閉じていない」などと言うのに倣って、 $Dretske$ や $Nozick$ が用いたものである。「閉じている」というのは、ある集合の要素に演算を施した結果が、再びその集合の要素になるという意味だから、例えば私が持っている知識全体の集合を考えて、そのどの二つの要素 A 、 B についても「 A を知っている」と「(A ならば B)を知っている」から「 B を知っている」が導かれるならば、私の知識の内容は含意 (ならば) のもとに閉じていると言える、というわけである。なお、この原理はより厳密には「図式」と言ったほうがよい。

⁸ Fred Dretske, "Epistemic Operators," *Journal of Philosophy* 67 (1970).

⁹ Robert Nozick, *Philosophical Explanations* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1981) 204.

¹⁰ 実際の $Nozick$ の分析はもっと複雑で、3、4の条件は特定の「方法」に依存する。ここでは議論を簡略にするために詳細を略す。また、3、4の「可能世界」も理解の助けのために導入したものである。実際 $Nozick$ もこの概念を使って説明している。もちろんこの「可能世界」は、様相論理の可能世界意味論に基づき、「到達可能な可能世界」という意味である。

¹¹ "If p weren't true, S wouldn't believe that p ."

¹² "If p were true, S would believe that p ."

要である。したがって、命題 P についてそれを知っていると言えるかどうかは、その P が可能世界の中でどのように振舞うかに依存する。 P が「私は培養槽中の脳でない」のような場合には、 P は現実世界からかなり離れた可能世界でしか偽にならないであろう。対照的に、 P が「私には手がある」の場合には、(不幸にも) すぐ近くの可能世界で偽であるだろう。したがって、たしかに私に手があることは私が培養槽中の脳でないことを論理的に含意するが、私に手があるかどうかを追跡できることが、培養槽中の脳であるかどうかを追跡できることを含意するとは限らない。

このように Nozick によれば、一般的に $K(O \rightarrow H)$ から $K(O) \rightarrow K(H)$ は帰結しない。したがって、 $K(H)$ の否定から $K(O)$ の否定は帰結しない。したがって $E C$ は否定され、 $S K$ も否定される。

問題点

これはなかなか魅力的な解法である。たしかに Nozick の追跡理論が正しければ、認識的閉包原理と共に懐疑論は否定される。そして追跡理論は少なくとも大枠において正しいように見える。

しかし認識的閉包を否定するとはどういうことなのか。一般化すれば、この原理は次のことを主張している。

【 $G E C$ 】 任意の演繹的推理 ($A, B, \dots$ ならば C) $\Rightarrow K(A), K(B), \dots$ ならば $K(C)$

つまり含意 (あるいはモドゥス・ポネンス) だけでなく、その他の演繹的推理についても閉包が成立しないことになる。たとえば次のような推論はすべて妥当でない。

- 1 P かつ Q を知っている。
- 2 ゆえに、 Q を知っている。

- 1 P を知っている。
- 2 ゆえに、 P または Q を知っている。

- 1 P または Q を知っている。
- 2 Q でないことを知っている。
- 3 ゆえに、 P であることを知っている。

- 1 a と b は同一であることを知っている。
- 2 a は P であることを知っている。
- 3 ゆえに、 b は P であることを知っている。

結局、認識的閉包を否定することは、私たちが演繹的推理に信頼して知識を拡大することを否定することである。もちろん Nozick らは、あらゆる場合に全く閉包が成立しないと主張しているのではない。しかし、閉包が成立しない場合があるという主張は、結局、演繹

推理の信頼性を疑問視することになるであろう。たしかに、認識的閉包を否定すれば懐疑論を回避できる。しかしその代償もまた大きい。¹³

文脈主義

認識的閉包という好ましい原理を放棄せずに、懐疑論について語ることはできないだろうか。

これまでに見た立場はすべて、懐疑論の推論（S K）に現れる 1、2、3 が特定の真理値をとる（真か偽のどちらかに決まる）と考える点で共通した。これに対して文脈主義は、S K の 2 と 3 が文脈に応じて真理値を変えたと考える。文脈主義は自らを「可変主義」（variantism）と呼び、他の立場を「不変主義」（invariantism）と呼ぶ。

たとえば、日常的な文脈において「私は夢を見ていないことを知っている」は真であり、懐疑的結論は偽である。しかし、特殊な文脈¹⁴においては、これらの真理値が逆転することもある。文脈主義は、このような変化がどのようなメカニズムで起こるかを説明する。たとえば、DeRose¹⁵は、「信念の敏感さ」「認識的立場の強度」という概念を用い、懐疑論がどのようにして知識の基準を押し上げるか、また、なぜ日常生活では懐疑論が真剣な問題とならないかを説明する。

以下に DeRose の理論を概説する。信念の敏感さ（the sensitivity of beliefs）は、Nozick の「追跡」をもとにした概念であり、いわば真偽を追跡していく力を言う。ある命題的信念について、主体がその命題の真偽を敏感に察知することができる場合に、その信念が敏感であると言う。逆に、真偽を敏感に察知できない命題の場合、それについての信念は鈍感（insensitive）であると言う。たとえば、「暖炉の前に座っている」「自分には手がある」などの信念は通常の人間にとって敏感であるが、「私は夢を見ていないのではない」「私は培養槽中の脳でない」のような信念は鈍感であるとされる。

可能世界を用いて言い換えれば、P についての敏感な信念とは、P が成立していない最も近い可能世界（最近接非 P 世界）にまで真理追跡が及んでいるような信念である。「自分に手がある」という信念が敏感であるのは、何かの事情で自分に手がないような世界で「自分に手がない」と正しく認識できる場合である。

DeRose のもうひとつの中心概念は「認識的立場の強さ」（the strength of epistemic position）である。これは、「B が P を知っていると言えるなら A が P を知っていると言える」場合、A は B より認識的立場が強い、というように用いる。たとえば、「走っている地下鉄の中で英語が聞き取れるなら、テレビのアナウンサーの英語はなおさら簡単に聞き取れる」というような場合、「走っている地下鉄の中での英語」という状況よりも「テレビから聞こえるアナウンサーの英語」という状態の方が、認識的立場が強い。この概念はこのような認識環境だけでなく、認識主体¹⁶や命題¹⁷にも適用できる。

¹³ 本稿では詳論しないが認識的閉包をめぐる議論は継続中である。最近の議論としては Fred I. Dresek and John Hawthorne, "Is Knowledge Closed under Known Entailment?," in *Contemporary Debates in Epistemology*, ed. Mattias Steup and Ernest Sosa (Malden: Blackwell Publishing Ltd, 2005). が参考になる。

¹⁴ たとえばこの原稿。

¹⁵ Keith DeRose, "Solving the Skeptical Problem," *Philosophical Review* 104 (1995).

¹⁶ たとえば「子供が P を知っていると言えるなら大人はなおさら P を知っていると言える」。

¹⁷ たとえば「それが福岡にあることを知っているなら、なおさら九州にあることを知っている」。

可能世界を用いて言い換えれば、認識的立場の強さは、どれほど遠くの可能世界まで真の信念を持っているか示す指標である。認識的立場が強いほど、遠くの可能世界でも真の信念を持つ。逆に、認識的立場が弱いと、すぐ近くの可能世界で、偽なる信念を持ってしまう。地下鉄の中では、ちょっと状況が変わると聞き取れない場合があるが、テレビのアナウンサーであれば、多少状況が変わっても聞き取ることができる。

さて、このように「敏感さ」「認識的立場の強さ」という基礎的な概念を定めた後に、一種の会話のルールとして次のような「敏感さのルール」(the rule of sensitivity)を提示する。

「SがPを知っている（あるいは知っているのではない）という主張が行われるとき、知識の基準は、その信念が敏感であるレベルにまで上昇する傾向がある」。¹⁸

信念が敏感であるとは、状況が変わっても正しく事実を追跡できるということであった。したがって知識の基準が信念の敏感さを要求するとは、Pを知っていると言えるかどうかだけでなく、十分に近い可能世界においても事実と一致しているかどうか、さらに、現実世界とは状況が変わって非Pであるような可能世界においても、正しく非Pという信念を持つことができるかどうか問題になるということである。

DeRoseは、これら「信念の敏感さ」「認識的立場の強さ」「敏感さのルール」を用いて、懐疑論のメカニズムを説明してみせる。まず、鈍感であるけれども認識的立場が強い信念を見つけ出す。「私は夢を見ているのではない」「私は培養槽中の脳ではない」などの懐疑的信念がこれに当たる。私たちはこれらの信念についてなぜか鈍感である。つまり、この否定が成り立っている世界（夢を見たり培養槽中の脳であったりする世界）であっても、「自分は夢を見ている」「自分は培養槽中の脳である」という真の信念を持つことが難しい。しかし、そのような世界は現実世界からはるかに離れた世界なので、そのような可能世界の構造上、何もしなくてもその信念の認識的立場は強い。言い換えれば、非常に広い範囲で、「私は夢を見ているのではない」「私は培養槽中の脳でない」は真となる。¹⁹

このような信念を見つけた上で、懐疑論者は、その信念について「知っているのではない」と言い出す。こう言われると、敏感さのルールにより、会話における知識の基準がその信念が敏感である程度にまで上昇する。つまり、もともと鈍感である懐疑的信念について、敏感さを要求する。もちろん、その要求を満たすことはできないので、私たちはその懐疑的信念について知っていると言うことができない。ところがすでに述べたようにこの懐疑的信念は認識的立場がとても強い。したがって、もしも懐疑的信念について知っているとさえないのであれば、それよりも認識的立場が弱いすべての信念についても、知っているとさえなくなる。かくして「自分が培養槽中の脳でないことを知っているとさえないので、私は自分に手があることを知っているとさえない」という懐疑論的命題がめでたくその会話の場において承認される。

¹⁸ DeRoseの表現は以下のとおり。“When it is asserted that some subject S knows (or does not know) some proposition P, the standards for knowledge (the standards or how good an epistemic position one must be in to count as knowing) tend to be raised, if need be, to such a level as to require S’s belief in that particular P to be sensitive for it to count as knowledge.” (DeRose 1995)

¹⁹ いわゆる「常識」と言われるものの中に、このような鈍感だが認識的立場が強い信念が多い点は興味深い。敏感な信念の場合にはその理由を言うことができるが、常識的信念の場合には理由を言うことができない。それは最近接非P世界が遠いために敏感である必要がなかったためだ、という説明のしかたもあるであろう。

DeRose の理論は、懐疑論が説得的に働くメカニズムをうまく説明する。なぜ私たちは哲学の議論としての懐疑論に説得力を感じながら、他方で、なぜ、日常生活において懐疑論がほとんど全く問題にならないのか。それは敏感さのルールによる。「知っている」「知らない」が問題になるレベルは、その会話の中で何が話題になっているかに応じて常に変化する。市場に行って買い物をしているような状況と、感覚経験の信頼性を議論しているような状況とでは、知識に要求される基準が大きく異なるのである。市場の中で「目の前にリンゴがある」ことを知っていても、哲学ゼミの教室で、それを知っているとは言えないのである。

【付録 納富氏へのコメント】

「知らない」と「不知の自覚」

納富氏は、ソクラテスの「不知の自覚」を哲学探究のパラダイムととらえ、その視点から、現代認識論を含む、近代以降の「知」の理解を批判する。彼の議論を理解するためには、まず、「不知の自覚」を理解する必要がある。

納富氏は、「不知の自覚」に関する二つの「誤解」を指摘する。一つには、それが「高次の知」ではないこと、もう一つは、そもそもそれが「知」ではないことである。

以下の分類に目を向けよう。(納富 2003: 49)

- A 知らないことを（そのとおり）知らないと思う。
- B 知らないことを（誤って）知っていると思う。
- C 知っていることを（そのとおり）知っていると思う。
- D 知っていることを（誤って）知らないと思う。

Aはソクラテスの態度であり、Bは世間一般の人々であるという。また、Dは「奇妙」であり、それは知に値しないというのが納富氏の評価である。

まず、これらを少しだけ形式化してみよう。記号の意味は周知のものである。

- (a) $\neg K(P) \wedge B(\neg K(P))$
- (b) $\neg K(P) \wedge B(K(P))$
- (c) $K(P) \wedge B(K(P))$
- (d) $\neg K(P) \wedge B(K(P))$

ここで、 $K(P)$ に Q を代入してみる。

- (a) $\neg Q \wedge B(\neg Q)$
- (b) $\neg Q \wedge B(Q)$
- (c) $Q \wedge B(Q)$
- (d) $\neg Q \wedge B(Q)$

納富氏は、a と c を「透明」、b と d を「不透明」と呼び、それぞれ、「自己が知に関して透明に捉えられている」「自己が自己に対して不透明である」と表現している（同、50）。しかし、一見して明らかなおとおり、a と c は、たんに、真なる信念を持っている状態、b と d は、偽なる信念を持っている状態である。前者が後者より優れていることは、ソクラテスに指摘されるまでもないであろう。

K(P)を無内容なQに置き換えると問題の核心を取り逃がす、という批判がありうるだろう。「知らないことを、そのとおりに知らないと思う」ことに、真なる信念を抱く以上の意義があるとしたら、それは何だろうか。考えられることは、「知らないことを、そのとおりに知らないと思う」ことは、たんに「知らない」ことよりも、知のあり方として、高いレベルに到達しているのだということだろう。ソクラテスは、たしかにそのようなことを言っているように思われる。

しかし、これは、いわゆる自覚・反省を求めることである。「知らないことを、知らないと思うこと」は、「知っていることを、知っていると思うこと」と表裏一体であろう。つまり、a と c は、認識的価値としては同値である。したがって、納富氏の意見に反して、不知の自覚は、高次の知である。

さらに納富氏は、この不知の自覚（そして知の自覚）が、「知ではない」と繰り返し述べる。たしかに、文献上、ソクラテスがそのような高次の知を退けていると言えるのかもしれない²⁰。しかし、この「不知の自覚」について、それを「知ではない」と理解することは困難である。

(a) $\neg K(P) \wedge B(\neg K(P))$

(c) $K(P) \wedge B(K(P))$

これらは、真であることがらを、その通りに信じている状態である。われわれの理解では、「知っている」とはこのような状態を言う。不知の自覚は、不知の知である。

もしも納富氏の主張が、あくまでもテキスト上、「知らないことを、知らないを知っている」となっていないのだ、ということであれば、そうならない理由は平明である。すなわち、a（やc）の状態を「知っている」状態だとすると、次のdはaの冗長表現となる。

(d) $\neg K(P) \wedge K(\neg K(P))$

(a) が、 $K(\neg K(P))$ であるとする、(d)に(a)を代入して、

(e) $\neg K(P) \wedge (\neg K(P) \wedge B(\neg K(P)))$

を得る。しかしこれは(a)に等しい²¹。すなわち、「知らないことを、知らないを知っている」は、「知らないことを、知らないと思っている」と同じ意味である。

²⁰ 納富氏の一連の論文の真の価値は、この文献的な調査にあると思われる。

²¹ $P \wedge (P \wedge Q) = P \wedge Q$

【参考文献】

- Alston, William P. *Beyond "Justification"; Dimensions of Epistemic Evaluation*. Ithaca: Cornell University Press, 2005.
- Bonjour, Laurence. *Epistemology: Classic Problems and Contemporary Responses*. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, INC., 2002.
- Conee, Earl, and Richard Feldman. *Evidentialism: Essays in Epistemology*. Oxford: Oxford University Press, 2004.
- DeRose, Keith. "Solving the Skeptical Problem." *Philosophical Review* 104 (1995): 1-52.
- Dresek, Fred I., and John Hawthorne. "Is Knowledge Closed under Known Entailment?" In *Contemporary Debates in Epistemology*, edited by Mattias Steup and Ernest Sosa, 13-46. Malden: Blackwell Publishing Ltd, 2005.
- Dretske, Fred. "Epistemic Operators." *Journal of Philosophy* 67 (1970): 1007-23.
- Feldman, Richard. *Epistemology, Foundations of Philosophy Series*. Upper Saddle River: Prentice Hall, 2003.
- Fumerton, Richard. *Metaepistemology and Skepticism*. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, INC, 1995.
- Greco, John. "Introduction: What Is Epistemology?" In *The Blackwell Guide to Epistemology*, edited by John Greco, Ernest Sosa. Oxford: Blackwell Publishers, 1999.
- Klein, Peter D. "Skepticism." In *The Oxford Handbook of Epistemology*, edited by Paul K. Moser. New York: Oxford University Press, 2002.
- Nozick, Robert. *Philosophical Explanations*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1981.
- 納富信留「ソクラテスの不知 — 「無知の知」を退けて—」『思想』岩波書店（2003）948, pp.37-57.

（うええだ・よしのり 福岡大学 教授）